

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 武内けん

挿絵 神保玉蘭

第一章	聖浴
第二章	奉仕
第三章	僧兵
第四章	破戒僧
第五章	邪淫戒
第六章	聖婚

登場人物紹介

Characters



ユーフォリア

ミルクア大聖堂の頂点に立つ聖女。物静かで超然とした雰囲気を漂わせている美女。

ベルベット

女性ばかりのミルクア大聖堂を束ねるシスターたちの教師役。真面目で堅物な雰囲気の熟女。

シギン

男子禁制の大聖堂に現れたヒルクルスに興味津々の、若いシスター。

グレイセン

女だてらに男勝りな性格と外見で、シスターたちの人気を集める僧兵。

ヒルクルス

イシュタル王国のクーデターに失敗した後、逃亡生活を送る少年騎士。

グレイセンが恥ずかしそうに顔を窺ってくると、ヒルクルスは力強く頷いた。

「うん、グレイセンみたいな素敵な女性を従者にできるなんて、望外の幸せだ」

「わかりました。主従の契りとして、わたしの処女を殿下に捧げます」

突如として、グレイセンの精悍な顔に自信が漲り、爛々と輝いた焦げ茶色の瞳には微笑さえ浮かんでいる。

（あれ、謀られた？）

という気がしないでもなかったが、ヒルクルスのほうももう我慢できない。

「じゃ、じゃ、はじめようか」

生肉をまえにして餓えた犬のように喘いでいるヒルクルスは、急いで女体を押し倒そうとしたが、止められた。

「殿下はそのまま。殿下は病み上がりなのですし、前回のシギンとのおきのようになられるとも限りません。わたしが入れて差し上げます」

「え……」

戸惑う間に、ヒルクルスは仰向けに寝かされてしまった。そして、腰を上げたグレイセンは、ヒルクルスの太腿辺りまで腰を引いて下ろし、ズボンの中から猛り狂う逸物を引っ張りだした。

「はあ、もうこんなに……」

天を穿たんとするかのようになそり立つ男根を、まるで宝石でも愛でるかのようによし

く両手で包んだグレイセンは溜息をつく。

「殿下のこのお大事を、わたしの中に入れてよろしいですね」

「ああ、今すぐにグレイセンのお大事に入りたい。でも、グレイセンははじめてなんだろう」

「はい……」

「なら、その……やっぱり痛いと思うよ」

シギンの痛がり方を思い出し、ヒルクルスは少し躊躇する。

「我慢します」

グレイセンはきっぱりと頷いた。なんとも無骨な返答である。

「じゃ、グレイセンの処女をぼくにちょうだい」

「いえ、わたしの処女膜を含めて、もはやすべて殿下のものなのです」

グレイセンは右手を逸物に添え、左手で陰唇を開いた。そして、先端を添える。

熱い愛液が、先走りの液に濡れる逸物にトロトロと流れ落ちてきた。そこに涼風が流れて、スウスウとする。

「じゃ入れて……」

「はい。では、殿下のお情けをちょうだいいたします」

毅然と宣言したグレイセンは腰を落とした。

ヒルクルスの頭上にある神樹に負けじと雄々しくそそり立った逸物。生ハムのような色をした秘肉が、丸く広がって、亀頭部がムリッといった感じに埋まった。

(うわ、すごいザラザラしている)

絡みつく贅肉にヒルクルスは目を白黒させる。

「くっ……」

グレイセンは眉を寄せて呻いたが、歯を食いしばり、そのまま腰を降ろしていく。さすがは聖堂騎士。見習いシスターなどよりも根性があると言うべきか。

両太腿の内側の筋をピクピクと痙攣させながら、ズブズブと肉棒を女の穴の中に呑み込んでいった。

この姿勢だと、二人の結合部が丸見えである。

精悍な顔だちのお姉様の股間に、自分の野太い逸物が少しずつ少しずつ呑み込まれていく様は、なんとも卑猥であり、それでいて迫力があつた。

そして、ついには根元まですっぽりと入ってしまう。

(……し、締まるう……ザラザラで締まるう)

同じ腔洞でも、シギンの体内は狭い、という体感だった。今にして思うとまだまだ大人になりきれないお子様の腔洞だったのだろう。しかるに、グレイセンの体内は、男根を啜えこむには十分なスペースがある。それでいて肉贅がギョッと締めてくる。

襲の抵抗が大きく、締まる腔洞は、啜えこんだ男根を二度と吐き出さないのでないか、という不安に駆られるほどだった。

(女の性格や体形がみんな違うように、オマ○コの感覚もまたみな違うのかも……)

ヒルクルスが感慨に浸っていると、グレイセンは腰を持ち上げた。ズボツズボツズボツ……。

卑猥な音をたてながら、熱い湯気を上げた逸物が外界に姿を現す。

「あ、わたしの中がめくれてしまいそう……」

顎を上げたグレイセンが、なんともらしくない情けない悲鳴を漏らす。

「たしかにすごい吸引だ」

ザラザラとした肉壺に締められているヒルクルスも、逸物を引っこ抜かれそうな感覚に身悶える。

そして、ヌルヌルと抜けてくる肉幹を見て、ヒルクルスは目を剥いた。

「グレイセン、大丈夫？」

陽光の下ということもあり、互いの結合部もよく見える。そこには赤い鮮血が溢れていた。

「は、はい……。大丈夫、です」

涙目になり、頬を引きつらせているグレイセンは、傍目にも無理をしているのは丸わかりだが、その頑固さが好ましくも映る。

二人はなんとなく手を握りあった。互いの指を絡めて、互いの掌が触れあう。掌を通して、互いの心に触れあうような不思議な感覚がする。

男女の指を絡めあわせて、グレイセンは再び腰を降ろした。

じゅぶぶぶぶ……。

シギンよりも大きいがよく締まる肉穴が、卑猥な粘着質な水音をたてながらも、今度はなかなかスムーズに男根を根元まで呑み込んだ。

「ああ夢のよう。わたしの身体が、殿下のお役に立てる日がこようとは……夢にも、思いませんでした……はあん♪」

ズッコ、ズッコ、ズッコ……。

だいぶ感覚を挿んだらしいグレイセンは腰をリズムカルに上下し出した。そのたびに肉棒によって肉壺から愛液が掻き出され、押し出される。

ザラザラの肉襞でキュンキュンと締めてくる肉壺の具合はすこぶるいい。

ヒルクルスは奥歯を噛み締めて耐えたが、まだ二回目の体験である。そうそう耐久力はない。女の柔肉に揉みくちやにされた男根が情けない悲鳴をあげた。

「グレイセン、もうイきそう……」

「で、殿下、わたしも……王子のお情けが欲しいです！ し、しかし、もう、もう少し、もう少しだけ、もう少しすればわたしも……はあ……」

グレイセンの要望に応じて、ヒルクルスは必死に我慢した。

人一倍自尊心の強い少年である。セックスをするからには、女にも満足してもらいたかったのだ。

「あん、また、大きく、捲れる、捲れちゃう、わたしのオマ○コが捲れちゃうう！」

グレイセンの性格が完全に変わってしまったようだ。啜り泣きながらも、ヒルクルスの手を取って、夢中になって腰を上下させるのだ。

しなやかな瘦身が反り返り、形のいいおっぱいが揺れる。そして、上下する腰の動きがどんだん早くなつていき、ブチュブチュッと愛液の飛沫が舞った。

(ああ、なんかぼく、グレイセンに強姦されているみたいだ)

シギンとの初体験のときには、ヒルクルスが腰を動かし、自分の好きなタイミングで射精した。

しかるに現在のヒルクルスは、まったく腰を動かしていない。女の思うがままである。

ヒルクルスは下腹部に力を入れて必死に耐えていたが、ザラザラキツキツの蜜壺の中で、男根が溶けていくのを感じる。

「あ……グレイセン、もうダメだ、許して……」

「あああ、また大きくなっ！」

男根が一段と大きくなり、エラが張り、抵抗が増した。その瞬間、さすがの狂雌の荒腰も止まり、歓喜の声をあげる。

「イクウウウウウウウッ!!!」

ヒルクルスが断末魔の悲鳴をあげると同時に、猛り狂っていた逸物の中をなにかが駆け上がり、昇竜の如く噴出した。

ドビュビュビュビュビュ——……!!!

その焼けつくような竜の咆哮を膾いっばいに受け止めたグレイセンは、身をそらして悶えた。

「あああああああああ……」

膾内射精を受けて、女体は反射的に絶頂してしまったのだろう。しなやかな鞭のような肢体が痙攣し、膾穴もまた痙攣していた。

そして、男根の勢いがなくなると、女体の強張りも収まり、ヒルクルスの胸に倒れくる。少年は反射的に女体を抱き締めた。

「はあ、はあ、はあ……」

男の胸に包まれた女と、女を腕に抱き締めた男。二人は荒い吐息をしながら、しばし余韻を楽しんだ。

やがて恐る恐るといった感じに、グレイセンが口を開いた。

「殿下、従者にももらった記念にひとつ、おねだりしたいものがございます」

「ん？ なに」

記念品などねだられても、今のヒルクルスにはなにもない。そのことはグレイセンも承知のことだと思いが……。

「殿下の仇の一人をわたしにお譲りください」

戸惑うヒルクルスに、グレイセンは真剣に申し出た。

「『銀色の戦女神』ウルスラ。その女はフィリックスの愛人だとか。つまり、わたしと同



「あああつ！」

さすがのユーフォリアも羞恥の悲鳴をあげた。

ミルクア大聖堂の巫女長の執務室。朝の澄明な陽射しの差し込む中、巫女長の恥部が大胆に晒される。

外側から充分に予想がついたことだが、中身は大洪水である。

燃え上がるように赤い陰毛は豊かで艶やかな輝きと潤いを帯びていた。

一本一本が太くてこしがある陰毛を梳くしけるように撫で回し、そして、搔き分ける。

そして、肉門に両手の親指と人差し指をかけると、ぐいっとばかりに四方に広げた。

「っ！」

完全に脱力しているかに見えたユーフォリアの肢体がピクリッと震えた。

（これがユーフォリア様のオマ○コか、綺麗だなあ……まるで朝露に塗れて咲き誇る紅薔薇みたいだ）

思わず嘆息したヒルクルスは、次に顔を近づけると、鼻から思いっきり息を吸い込んだ。

（ああ、これがユーフォリア様のオマ○コの匂い……）

立ち上る匂いは甘酸っぱく、なかなか強烈である。

大聖堂のシスターたち、すなわち、処女を百体近く食べてしまった経験として、男性経験のないとき、女性はあまり陰唇を丁寧に洗わないようである。そこに自分で触れることに抵抗感があるようなのだ。

逆に破瓜が済むと、その重要性を悟るのか、丁寧に洗い清め始めるらしい。

そして、ユーフォリアの陰唇から立ち上る性臭。そこには単なる愛液の甘酸っぱい香りのほかに、恥垢とお小水の匂いもする。

ヒルクルスの経験上、典型的な処女の陰唇の匂いだ。

恩返しとか殊勝なことを言っているヒルクルスだが、つまるところ好きな女性の性器である。少しばかり匂いが強烈でも嫌悪感など懐くはずがない。

ヒルクルスは、蜜に吸い寄せられる蜂であるかのように、女性の濡れた花卉に口付けをした。そして、ペロンと舐めあげる。

「あっ……んっ……」

ユーフォリアは小さく悲鳴をあげた。

（ユーフォリア様の愛液はまるやかな味だな。なんというかお人柄が出ているというか、うん、舐め易い。これならいつまでも舐めていられるな）

酸味も塩味も苦味もそれほどきつくない。飲み易い愛液である。

そこでヒルクルスは気高き佳人の贅肉の裏側まで丁寧に舌先を這わせた。

「あ、あん、ああん♪」

さすがの聖女様も喘ぎ声を我慢できないらしく、辺りをはばかり大きく声を出してしまっている。

そこで気をよくしたヒルクルスは、膣口や尿道口まで探り当てたあと、いったん口を離

し、指先で包皮に包まれている陰核を小突いた。

「ねえねえ、ユーフォリア様。ほんとにここ自分で触ったことないの？」

「はあ……はあ、ああん……っ、な、ないわ……」

「どうやらほんとに初めてみたいですね。さすがは誇り高い聖女様だ」

息も絶え絶えといった様子のユーフォリアをまえにヒルクルスは感心した。

（ということは、このクリトリスの包皮を剥いちゃったら、ぼくが初剥きしたということになるんだよな。……剥いちゃお）

ユーフォリアのすべてを見たい、このお姉様のすべてを自分のものにしたいと欲した少年は、人差し指と親指で陰核を摘んだ。

「いや、いや、いやあああ！」

女の急所を捉えられてしまった聖女様は、赤ん坊のように両手を握り締め、イヤイヤと首を横に振った。

しかし、もう遅い。

どんなに高潔な聖女様も、たつぷりと溢れた愛液を掬った濡れた指で陰核を摘まれてしまったのは、なすすべがない。

ヒルクルスは包皮に包まれた陰核を、クネクネクネと弄んだ。

「あっ、……あっ……、はっ……、はっ……、あっ、あっ……あっ」

ユーフォリアは必死にこみ上げてくる快感と戦っているようだった。しかし、瑞々しい



第六章 『聖婚』より

「あっ」

覚悟を決めていたユーフォリアだが、小さく悲鳴をあげてビクッと逃げようとした。しかし三方から女たちに押さえつけられて動けない。

そのため逸物は順調に呑み込まれていく。

（はあ、温かい。それにすごいヌルヌルだ）

まるでミミズがたくさん隠れているのか、と思えるほどに無数の肉壁が、男根の隅々に絡みついてきた。

決して強く締めてくるわけではないが、すぐ射精したくなるような蠕動だ。その射精欲求と戦いながらも、処女慣れしている少年は相手を氣遣う。

「痛くないですか？」

「ええ……違和感がありますけど……」

そこでゆっくりとゆっくりと進み、やがて男根はずっぼりと根元まで食べられてしまう。無数の壁がヤワヤワヤワヤワと男根に絡みついてくる。

「巫女長様ったら、なんて幸せそうなお顔なのかしら」

ユーフォリアの頭上から見下ろすベルベットが陶然と溜息をつき、目を輝かせたシギンは嬉々として質問してきた。

「ヒルクルス様、どうですか、巫女長様の体内は？」

「ああ……すごい気持ちいい……」

陶酔の声を漏らす少年の顔を、三人の立会人は複雑な顔で見やる。

「あの……王子、そろそろ動かされては……？」

グレイセンの提言を聞いたヒルクルスは、ユーフォリアの体内に自分の身体が馴染んだことを確認しつつ頷いた。

「じゃ、ぼく、動きますね。ユーフォリア様」

ヒルクルスは前のめりになって愛しの聖女様の腰を抱える。高く上げられた両脚を男が掴めば、『深山』という体位になるのだろうか、その両脚は女たちに抱えられていた。

ヒルクルスは男女の結合部を覗きながら、ゆっくりと腰を使い始める。

「あ……、あ……、あん……、あん……」

クチュクチュと男女の結合部から卑猥な水音がする。

ヒルクルスは、シギンやグレイセンをはじめ、百人近い処女をいただいてきたが、こんなにスムーズな初体験ははじめてだった。

やっぱり十代の半ばの少女とは違い、二十代前半のお姉様は、男を迎え入れる器として完成しているということなのかもしれない。

（うっ、それにしても鬘が多いよ……。シギンみたいに狭いんじゃないかと、グレイセンみたいに締まるのでもない。ベルベットみたいに蕩けるのとも違う。ザラザラとして豊富な肉鬘がオチンチンの隅々に絡みついてくる）

逸物を入れているだけで、すぐに暴発してしまうのではないか、という不安になる。

しかし、こんな気持ちいい蜜壺の中で動かないなんて、もったいない。

絶世の名器を楽しもうと、ヒルクルスは暴発に注意しながら腰を使った。しかし、気持ちいいものは気持ちいい。我慢できずに腰使いはどんどん早くなっていく。

「はっ、はう、うん……」

一突きするたびに弾力ある乳房が、プルンプルンと踊る様も迫力がある。

（それに感じている表情がすごいセクシーだよなあ……）

少年の荒腰を食らって聖女様は、恍惚とした表情を浮かべていた。あまやかな吐息を漏らす口唇から、涎を垂らしてしまっている。

あの気高い聖女様が、こんな表情をするなど、見た者でなければ想像もできないだろう。（ユーフォリア様のこの表情を知っている男はぼくだけなんだ）

独占欲を感じたヒルクルスは、自分だけの聖女様にもっともっと感じてもらいたい、と欲した。

この体位だと男は好きだけ腰を使うことができるから、ヒルクルスの腰はどんどん早くなっていき、子宮口までコツンコツンと小突く。

「あっ……」

ユーフォリアが小さく悲鳴をあげたと同時に、肉壁がヒクヒクヒクと一段と激しい蠢動しゅんどうに変わる。

「ああ……二人ともやめて……」

顔を真っ赤にした聖女が目を見開き、ヒルクルスの後方に視線を向けているので、何事かと窺う。

「あふ、巫女長様つたらいやらしすぎます。そんなにオマ○コがヌチ○ヌチ○している光景見ていたら、わたしたちもう……」

床に両膝をついたシギンが、伸び上がるようにしてユーフォリアの左脚を舐めていた。足首から足の指。そして、指の間までネチネチと舐めている。

「王子お手伝いいたします……」

反対側ではグレイセンもまた、同じように聖女様の右脚を舐めしゃぶっていた。

シギンには少しレズつけがあつたような気もするが、グレイセンは同性愛的な目で見られることを嫌悪していたはずである。

その二人がもうたまらないといった表情で、聖女様の美脚を抱き、胸に押しつけるようにしつつ、その指先を舐めているのだ。

よく見ると二人とも、さりげなく自らの股間をまさぐっている。

「まったく、若い子はほんところえ性がなくていけませんわね♪ これは大切な儀式だと申しますのに……」

淫らかな表情で嘲笑を浴びせた黒衣のシスターは、両手を聖女様のまえに回すと、その乳房を手に取り、モミモミと揉み出した。

「あああ……」

足の指を舐められるというのは肉体的にそれほど快感ではないだろうが、視覚的效果として、背徳感を刺激するものらしい。

そのうえ確かな性感帯である乳房を揉みしだかれたのだ。

「ああ、ああん、ああ……」

破瓜の最中だというのに、ユーフォリアは一気に高まってきてしまったようだ。

喘ぎ声が切迫してきて、肉棒を包む襞の蠢動も激しくなってくる。

「あっ……」

ユーフォリアとヒルクルスが小さく同時に悲鳴をあげた。

聖女様の蜜壺の最深部まで突き刺さった逸物がビクンビクンと激しい痙攣をしたのだ。ヒルクルスは慌てて丹田に力を入れて耐えた。

（いま、ちよつと漏れちゃった……。我慢我慢我慢……）

絶世の名器は、感じ始めるとさらに男殺しの蟻地獄に化け出した。

シギンやグレイセンやベルベットの援護はありがたいが、やっぱり自分の逸物でユーフォリアを絶頂に導きたいと欲した少年は、先端まで精液が溜まっているのを自覚できるほどに飽和状態の男根を使って、さらに果敢に激しく腰を動かす。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ……」

今にも爆発しそうな気配も濃厚な逸物で、連続して子宮口を突かれましたったお姉様は、しなやかな美体をビクンビクンと痙攣させる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>